

旧日本軍による細菌兵器攻撃の事実

新発見史料「金子順一論文」は731部隊による細菌戦の何を明らかにしたのか



●慶応義塾大学名誉教授・「戦争と医の倫理」の検証を進める会世話人

松村 高夫 まつむら たかお

社会史・労働史専攻。731部隊・細菌戦に関しては、家永教科書裁判および戦後補償裁判において法廷証言や鑑定書提出。共同著作として『論争・731部隊』（晩聲社、1994）、『戦争と疫病——七三一部隊がもたらしたもの』（本の友社、1997）、『裁判と歴史学——七三一細菌戦部隊を法廷からみる』（現代書館、2007）など。森村誠一作詩・池辺晋一郎作曲のカンタータ「悪魔の飽食」をうたう合唱団に所属し内外で公演。

- 昨年発見された731部隊所属の医師・金子順一の論文には、同部隊が中国の6地域に細菌攻撃した際の、年月日、散布したペスト感染ノミの重量、一次二次感染による犠牲者数などが示されている。そのうち、衢県、寧波、常德、玉山などの4地域は既知だったが、ペストが自然発生とみられていた農安など2地域では初めて示されたデータである。これにより農安から伝播した新京ペストの大流行（1940年）との関連も判明する。
- 日本政府は金子論文の発見により、731部隊・細菌戦の事実を認めなければならないし、その旨の追求も去る6月15日衆議院外務委員会で行なわれた。

医師・金子順一論文の発見

2011年夏に奈須重雄氏（NPO法人731部隊細菌戦資料センター）が、金子順一論文を国会図書館関西館で発見した。それは731部隊による細菌戦の実施の新データを含んでいたため、日本では『朝日新聞』（2011年10月15日）、『東京新聞』（2011年10月16日）が報道し、韓国、中国でも衝撃を与えるニュースとして報道された。

金子順一は1936年東京帝大医学部を卒業し、37年7月に関東軍防疫部（731部隊）員になり、731部隊長石井四郎に重用され

た軍医であった。43年3月には陸軍軍医学校部員、同年4月には第九技術研究所（登戸研究所）所員を兼任し、45年8月31日に復員した。戦後は、50年9月から73年3月まで武田薬品に勤務し、山口県光工場でワクチン製造にかかわっている。金子が戦後、1949年に東京大学に医学博士号取得のために提出した論文は、『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部に1940年から44年にかけて掲載された論文8点を合本したものである。8点のうち、特に注目すべきは「PXノ効果略算法」（『同』第1部第60号、1943年12月14日受付）である。

表 「既往作戦効果概見表」

細菌攻撃実施日	地名	散布したPX重量	死者数	
			一次感染	二次感染
1940年6月4日	農安(吉林省)	5グラム	8人	607人
1940年6月4日～7日	農安、大賚(吉林省)	10グラム	12人	2424人
1940年10月4日	衢県(浙江省)	8キロ	219人	9060人
1940年10月27日	寧波(浙江省)	2キロ	104人	1450人
1941年11月4日	常德(湖南省)	1.6キロ	310人	2500人
1942年8月19日～21日	広信、広豊、玉山(江西省)	131グラム	42人	9210人

(出所：金子順一「陸軍軍医学校防疫研究報告」「既往作戦効果概見表」より表を作成)

Pはペスト菌、Xはケオプスネズミノミのことで、PXとはペスト感染ノミを意味する。その論文なかの「従来の作戦等によるPXの効果」を示す「既往作戦効果概見表」が特に重要である。そこには表のような、6つの細菌「攻撃」ごとに、地名、実施日、散布したPXの重量、1次感染による死者、2次感染による死者が示されている。PXの重量がグラムになっているところは地上散布、キロとなっているところは飛行機からの空中散布だろう(次ページに細菌戦被害地図)。

731部隊による細菌戦

ノミをペスト菌に感染させ飛行機から投下する方法は、ペスト菌を空中から投下すれば菌は死滅するという、当時の世界の生物学界の常識を超える731部隊の独自の発明であった。ハルビン郊外の平房^{へいぼう}にあった731部隊の通称口号棟のなかには、第1部・細菌研究部(部長は菊池齊)と第4部・細菌製造部(部長は川島清)が置かれたが、第1部のペスト菌研究の責任者は高橋正彦であった。彼が1940年農安^{のうあん}・新京^{しんきょう}ペストの調査を行い報告書を作成するのである。第4部のペスト菌製造の責任者は野口圭一であった。

部長の川島清は、ハバロフスク裁判(1949年12月)で、ノミの大量繁殖のために平房の第2部に4つの特別室があり、摂氏30度に室温が保持され、2～3カ月の製造周期に45キロのノミを採ることができたと述べたあと、次のように答えている(『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』外国語図書出版所、1950年、300-302頁)。

- (問) 細菌戦ノ際、此ノ蚤ヲドウスル積リダツタカ?
- (答) ソレハ、ペスト菌デ汚染サレル筈デアリマシタ。
- (問) ソシテ、細菌兵器トシテ使用スルノカ?
- (答) ハイ、其ノ通りデアリマス。
- (問) ペスト蚤ヲドンナ方法デ、細菌兵器トシテ使用シヨウトシタノカ?
- (答) 私ノイタ時ハ、蚤ヲ飛行機カラ投下スル方法ガ最モ有効ナ方法デアルト看做サレテイマシタ。
- (問) 中国派遣ノ時モ、蚤ヲ飛行機カラ投下シタカ?
- (答) ハイ、ソウデアリマス。
- (問) ソレハ、ペスト菌デ汚染サレタ蚤ダツ

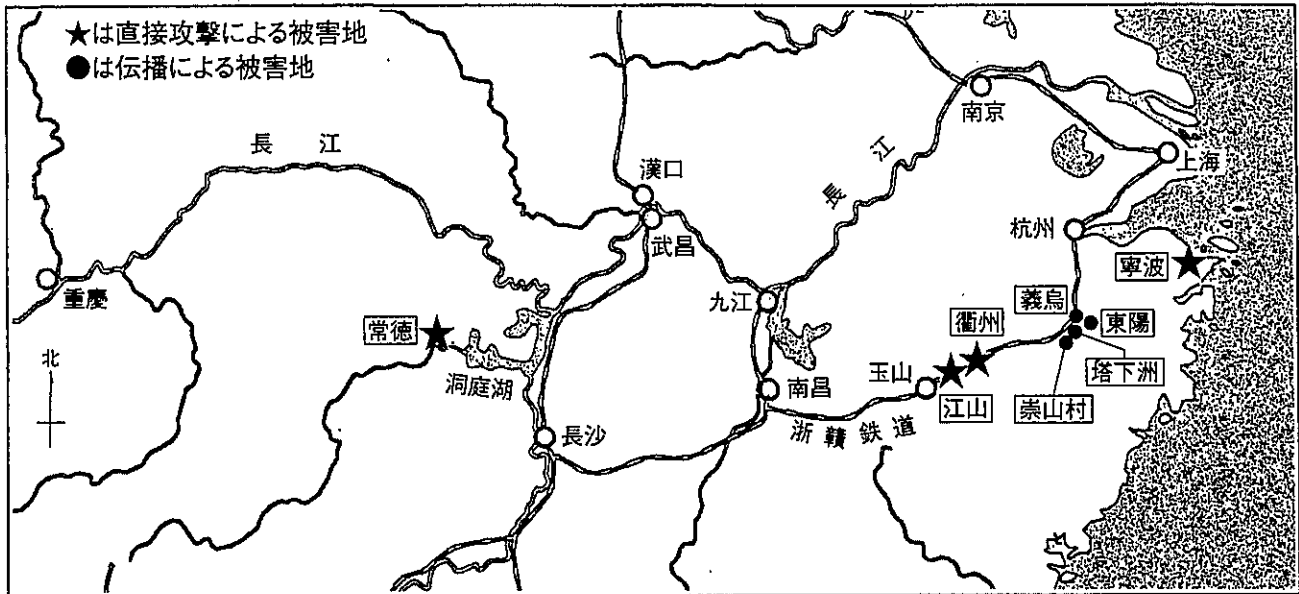


図 細菌戦被害地 (1940年～1942年当時)

タカ？

(答) 其ノ通りデス。中国ニ於ケルペスト
蚤ニヨル細菌攻撃ハ、ペスト流行病
ヲ発生セシムル筈デシタ。

防疫給水部は、ハルビン（平房）の731部隊のほかにも、中国各地につくられた。1940年までには北京（「甲」1855部隊）、南京（「栄」1644部隊、多摩部隊）、広東（「波」8604部隊）にでき、それぞれが数支部から十数支部をもっていた。

日本軍がシンガポールを占領すると、シンガポールにも南方軍防疫給水部（「岡」9420部隊）を設置した。これらの部隊は、731部隊が関東軍司令官の指揮下におかれたように、それぞれ北京が北支那派遣軍、南京が中支那派遣軍、広東が南支那派遣軍、シンガポールが南方派遣軍の司令官の指揮下にあった。このように中国各地に細菌戦実施の組織が網の目のようにできていたのである。

まず、ノモンハン事件のときに731部隊員がハルハ河支流、ホルステン河上流でチフス菌を散布したのに続いて、日本軍は1940年から42年にかけて中国十数都市で細菌を散布した。1940年秋には浙江省の諸都市にペスト菌が散布された。10月4日、衢州（衢県）に日本軍機がペスト感染ノミを投下してペストを流行させたが、同年12月7日に流行は一時終息するものの、2次3次感染により被害は拡大し、防疫のため医師・ポリツァーが派遣された。ようやく翌41年12月にペスト流行は終息するが、衢州県城と周辺農村の死者は1500人以上を数えた（医師・邱明軒の推計）。

続いて1940年10月27日、寧波に日本軍機がペスト感染ノミを小麦の粒とともに投下し、ペスト流行は12月2日まで続いたが、1カ月余の間に109人が死亡した。同年11月27・28日には金華に日本軍機がペスト生菌を投下した。この時は生菌であるため地上

に落下するまでにペスト菌が死滅し、ペストは流行しなかった。このように寧波と衢州ではペスト感染ノミを、金華ではペスト生菌を投下しているが、これは両者の効果を比較するためであったろう。

1年間のブランク後の常徳じょうとくの投下（1941年11月4日）では、周辺の農村の数次感染を含めると、現在その氏名・住所がわかる死者は7000人を超えている。翌42年8月の細菌攻撃は、浙贛せつかん作戦の際、打通後日本軍が撤退するとき地上でPXなどを散布したもので、広信こうしん、広豊こうほう、玉山ぎょくざんは典型例である。

以上の細菌戦の実例は、前掲金子順一論文の表では3番目から6番目までのケースに示されている。だが表の最初の2つのケース、すなわち1940年6月4日、農安でPX5グラムが散布され、1次、2次計615人の死者が出たこと、続いて6月4日～7日まで農安、大賚だいらいに到る各地でPX計10グラムが散布され、1次、2次計2436人の死者が出たことは、今回初めて判明したことである。これまでは1940年の農安ペストは自然発生と考えられており、それが新京に伝播して新京ペスト大流行になったと捉えられてきたからである。そうになると、ペスト班長・高橋正彦の農安・新京ペスト調査論文も新たな意味をもつてくることになる。

農安、新京のペスト流行と金子順一と高橋正彦の連係

高橋正彦論文とは高橋が『陸軍軍医学校防疫研究報告』第2部の論文を合本し、1949年慶応義塾大学に医学博士号取得のために提出したものであり、2000年9月慶応大学医

学部倉庫で発見された（『朝日新聞』2000年9月9日夕刊）。そのうちで特に金子論文と関連するのは、高橋「昭和15年農安及新京ニ発生セルペスト流行ニ就テ」第1編～第5編である。

1940年6月、PXが農安の地上で散布されると、ただちに高橋正彦は農安に向かったことになる。高橋は「昭和15年6月カラ11月ニ至ル農安ペスト流行時ニ其ノ流行ノ根源地タル農安街ニ於ケル住人ニツキペスト皮膚反応ヲ検査シ、之ヲ地域別、性別及年齢別ニ観察セルニ極メテ興味深キ成績ヲ得タリ」と書いている。

そして高橋は、はやくも1940年7月2日と7月15日に農安の腺ペスト患者の腺種から菌株を分離している。さらに、高橋は農安の下水溝のノミ、ネズミの有菌性を地域ごとに詳しく調べ、感染経路を明らかにする調査をし、「ドブネズミ間ノ病毒ガ人ペストノ直接ノ伝染源トナツタ。」「蚤ヲ介シテ人ニ伝播サレタモノ」（「高橋正彦ペスト菌報告書」）と結論付けている。

農安のペスト発生により合計353人が死亡した。同年9月下旬には60キロほど離れた「満州国」の首都新京（現在の長春）にも感染した。同年10月7日に新京に現れた731部隊は、「関東軍臨時ペスト防疫隊」として活動する。この防疫隊の本部長は石井四郎、他に満州国、満鉄（南満州鉄道株式会社）の要人が本部を形成し、同年11月7日に新京から平房へ撤退するまで1カ月間新京に滞在した。満鉄が派遣した医師は145人、満州医大学生も147人が新京に派遣された。

このように、731部隊が新京・農安に出

動して防疫活動をしたのは、浙江省における細菌作戦から眼をそらすための陽動作戦ただけではない。731部隊は防疫活動の中で新たなペスト菌株を得たのである。

新京で78体、農安で48体のペスト死亡者を解剖し、ペスト菌検索を行い、死体から各臓器を採りプレパラートにして平房に持ち帰った。高橋正彦がそれらの資料を分析した。高橋が農安で、下水溝のノミ、ネズミの有菌性を地域ごとに詳しく調べ、感染経路を探求したのは、新京から農安へ大規模な防疫隊が送られる以前であったことは言うまでもない。防疫活動がなされる前に、地上に散布したPX5グラムがどのようにして感染を引き起こしていくかを調査しなければ意味がないからである。

なお1990年に発見された米国ダグウェイ文書の数百ページから成る『Q報告』は、この農安・新京ペストの報告書を詳しくしたものであり、臓器ごとのプレパラートにもとづくカラーの模型図が付いているもので、戦後、高橋正彦がその英文報告書の作成に協力していることが記されている。

1940年秋の浙江省への細菌攻撃のあと1年間のブランクがあったのは、その間に新京・農安の調査を通してペストの発生と伝播の仕組みを知り、獲得した多数のペスト菌株を培養し、ペスト菌感染による臓器の分析を行い、その後確信をもって常德にPXを投下したものと考えられる。

また、農安から新京へのペストの伝播については、新京に向かって徐々に伝播するのではなく、ペスト患者が新京駅近くの「三角地帯」にある犬猫病院で突然患者が現れたので、

「農安某富豪が同病院（田島病院）ニ入院セシメタル一飼犬ニ依り流行地病蚤ヲ搬入セルモノニアラズヤト疑ヒ余ハ本発患者ガイヌノミニ依ルペスト感染ナラズヤト着目シ」た平澤正欣の論文「『イヌノミ』ノ「ペスト」媒介能力に就テノ実験的研究」（これも『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部の数編からなる医学博士号取得をめざして1945年に提出された論文集）が検討に値する論文として浮上してくる。今後の課題である。

農安と農安大賚のペスト菌散布については、今年（2012）7月下旬から「NPO法人731部隊細菌戦資料センター」が現地調査を行うので、新しい事実が判明することが期待されている。

衆議院外務委員会での金子論文をめぐる質疑

去る6月15日（2012年）には、衆議院外務委員会で服部良一議員（社民党）が金子論文を示しながら、これまで細菌戦については史料がないので事実関係がわからないとしてきた日本政府は、金子論文についてどう考えるのかと質し、政府の責任で731部隊関連の調査機関を設けるよう要求した。

服部議員「……七三一部隊と日本軍による細菌戦の問題なんですけれども、二〇〇三年の十月に、『外務省、防衛庁等の文書において、関東軍防疫給水部等が細菌戦を行ったことを示す資料は、現時点まで確認されていない。』としつつ、『新たな事実が判明する場合には、歴史の事実として厳粛に受け止めて行きたい。』こういう政府答弁をされておるんですね。

それで、きょう、ちょっと資料をお配りいたしましたけれども、その新たな事実が国立国会図書館の関西館に所蔵されているということが昨年十月に日本の民間研究者によって発掘されました。七三一部隊所属の金子順一軍医少佐による論文集であります。この中で、昭和十五年から十七年まで、六回にわたる細菌作戦が実施をされた場所、効果等がまとめられているわけです。これは米国が行った細菌戦に関する事実調査の結果とも符合する、既存の信頼できる資料等とも符合しているわけですが、大臣、この金子論文の新たな発見を踏まえて、日本政府として中国における細菌戦の事実の問題についてどういう見解をお持ちか、お聞きしたいと思います」

これに対し玄葉国務大臣は、「……いわゆる七三一部隊の活動の詳細についてはやはり政府内部に資料は見当たらないというのが今の実態でございます。今のご質問は、この金子論文が新たに事実として出たのではないか、こういうお話なんだろうというふうに思いますけれども、今回、少なくとも、見つかった資料も含めて、歴史の学者の方々が今後どういう研究をし、その研究の深まりがどうなっていくのか、そういうことを踏まえながら、まさに先ほどおっしゃっていただいたように、新たな事実がこのことで判明するということかどうか、そういったことを判断していきたいというふうに思っております」と答えている。

さらに服部議員が「学者ということじゃなくて、これはもともと国が起こした戦争、国の機関としてやったことですから、ここはやはり外務省としてきちっと受け止めてやって

いただきたいということを申し上げておきたいと思います。細菌戦遺族の皆さんの希望は、日本政府の責任で旧日本軍七三一部隊等の調査機関を設けて事実調査をまず行ってほしいということをおっしゃっているわけです。ですから、この金子論文が発見されたということの一つの大きな契機をして、七三一部隊の細菌戦の調査研究、真相究明に着手するという決意をぜひおっしゃっていただけませんか」と追求すると、玄葉大臣は「細菌戦に係る事実関係などは、時間的経過などを踏まえれば、政府が例えばさらなる調査を行って事実関係として断定できるのかどうなのかといえ、やはりこれはかなり難しいのではないかという風に思っています」と否定的な回答をしている（2012年6月15日、「衆議院外務委員会速記録（議事速報）」2ページから）。

このように、玄葉大臣はこれまでの731・細菌戦の研究の蓄積を知らずに、あるいは無視して、金子論文は新たな事実を示したかどうかには曖昧な返答をし、今後の歴史家の研究、調査の進展に委ねたいとの答弁で逃がっている。

今後も731・細菌戦は史料が政府内にならぬから事実関係が分からないとする日本政府に対し、金子論文は関東軍防疫給水部に所属した医師が書いた文書で、日本軍の軍医学校刊行の『陸軍軍医学校防疫研究報告』に収録された文書であることを強調し、731部隊・細菌戦の活動の事実を認定させなければならない。同時併行で、731部隊細菌戦に関する国による調査機関の設置を求めていかなければならないのも自明のことである。